「離愁」における保身の構造

――芹沢文学の倫理性の発想法――

大森郁之助

Ⅰ

自身が現役の作家であり、同時に他人の小説に対する読み巧者だという存在として、例えば宇野浩二が、川端康成が、伊藤整が、或いは永井龍男が、しばしば挙げられる。ところで、そうした一人であった高見順に、芹沢光治良の「ブルジョア」（昭5・四月発表）に対する次のような解説がある。(注1)

沢（引用者注、「ブルジョア」の主人公）――芹沢光治良は、亡びゆくプチ・ブルの運命に身をゆだねながら、そういう形で、歴史の進行に身をゆだねようとする。そこに自由主義者芹沢光治良の出発があり、そして芹沢光治良そのひともそこにある。

読み巧者ということへの信頼は、勿論、作品分析の方法論的正しさを認めた場合の信頼などとは性質が違う。いわゆる客観的な実証性とは縁の遠い、しかも極めて大まかな意味での妥当性に関しての信頼、という限定があろう。しかし元来、小説に対するわれわれの関り合いは、いわゆる読後感という、殆どの場合直感的に（直感し得る範囲内で）成立する――少なくとも分析や論証の以前に成立してしまう種類の判定が、起点となっている。そして自他におけるそれの謬りの無さと、細部（ていねい）とを、固めたい欲求が、いわゆる作品研究の基盤とも成るのではないか。そして、読み巧者の某氏の印象というものは、われわれの読後感一般にとって、標準値と見なすのは自惚れだとしても、達すべく又達し得るはずの指標とは謂ってよかろう。

そういう意味で右の高見順の解説に織り込められている「ブルジョア」の印象は、われわれが「ブルジョア」を考える場合の原点となり総括する場合の大枠となってよいものではあるまいか。

それは、「ブルジョア」の主人公「沢」即、作者芹沢、という理解である。

もっとも、そんな理解は高見順の言をまつ迄もなく絶対多数の読者にとって容易に成立し、かつ、何の疑いも持たれるわけではない、ともいえよう。「三年も巴里で」暮らした沢は「やはり巴里の空気がいけなかったの」か、一年前から此処すいすの結核都市で療養所に入っている。付添いの沢夫人は月一回銀行に下りて行き、帰って来ると「色々麓のモントルーで見たことを、細大漏さず、本屋のショーウヰンドーの中から、レストラン・モンブランのお客の数まで、話すのが常であ」る。「さうして聞いてゐることが、沢にも楽しいこと」なのだが、外部の健康な世界に接すると夫人はときに「余り不幸過ぎる自分が悲しくな」り、「やっと歩けた女の子、託児所の赤ん坊達、日本の家庭」などが「熱い目を閉ぢても映る。」（一章）或る時は遂に「子供を連れて一人日本に帰らうと決して、巴里に行ったが、子供の顔を見るとすまなくなって、又出て来」たりする。こうした沢夫妻の状況

設定は、作者芹沢が大正十四年農商務省を辞してふらんすに留学、昭和二年肺炎に倒れすいす・ふらんすの高原療養所に入り、昭和四年の暮れ帰国したという、よく知られている経歴に、ぴたりと嵌まりこむ観があろう。

但し正確にいえば、通常の読者がもち得る右の程度の伝記的知識では、子供の存在や沢夫人の心境に対応するものが作者の私生活事実としても有ったのかどうかは、明確でない。高見順の場合はともかくとしてわれわれの速（?）断には、作者芹沢に異国での療養生活という特異な体験がありこの作品も又そういう特異な題材であるから即体験、といった、通るようで通らない論理が無意識に働いているかも知れない。だが考えてみるまでもなく、この題材が特異なのは在外療養生活の体験のないわれわれにとってだけであり、作者にとっては、自分の周囲の療養者の身の上に見聞することも有り得たものであろう。

しかし更に考えれば、「ブルジョア」の冒頭には沢夫人が「よく山で会ふがまだ挨拶したこともない」ふらんす人から、「貴方は『エスポアール』に居られる日本人でせう?」（傍点引用者）と話しかけられる場面がある。後年の「離愁」（昭19成稿）にも、「私」が「日本を代表してこの土地にのりこんだやうに」張り切り、それを迎える先輩の仏人患者たちが日本人と同一食卓につくべきかどうかで大議論した、という挿話を記したりする。（一章）若干の小説的粉飾はあるとしても、日本人の療養者が極めて稀だったということは恐らく事実だったとすれば、日本人の療養生活という題材は自身の体験以外に見聞はし得なかったというのが真相に近かったろうか。

更に後年定説化したように、「ブルジョア」以後芹沢作品には「私生活から取材されているものが多」く、[注2]「自伝的要素が強い。」[注3]」溯って「ブルジョア」をも体験に基づくものと納得させる所以はあろう。しかも、一般に私生活取材作品が多い、というにとどまらず、「ブルジョア」とよく似た状況の在外療養生活を「私」夫婦という一人称で描いた前引「離愁」のような作品もあるのである。

全体として風俗小説ふうな趣のある「ブルジョア」の、表現はいわゆる私小説とかなり異なるものがあるが、それと題材の性質とは別の問題である。廻り廻って、「ブルジョア」が体験に取材した作品という通常の理解は覆り難いし、そういう理解に対する作者の不満といったものも、とくに聞かれていない。

ところがその「ブルジョア」と、十目の観るところ同一題材と思われる前述「離愁」に到ると、事態は些か変ってくる。

「離愁」は全十二章から成るが、その冒頭に、本篇の作者を「父」にもつ「〇〇子」なる女性の、「芹沢先生」に宛てた私信形式の序を置く。その文章によれば、本篇を述作した「父」は「生前文学のために独り苦しみながら一作も発表しなかった」。死後、その「許可なくして」送った遺稿を「芹沢」が「さっそく」「興味を持って」読み、「思ひがけなくあんなに褒めて」くれたのが、先年（昭16）発表の「孤絶」であり、その「第二部と第三部のやうにも考へられ」るのがこの「離愁」及び「故国」（昭22発表）だ、という。

ところで「私」（〇〇子）は、この遺稿を読むと「そのなかの父と母とが我が両親でないやうなのが、長い間の私の悲みであり、疑惑のたね」であったが、これを「作品として」読んだ「芹沢」の読後感を聞いて「やっと」、「事実と読みちがへてゐたことに気づいて、安心したり、愚かな私を笑ったりした」という。「ほんたうに、私の両親は遺稿のなかの父や母のやうなお人柄ではありませんのに、私はお馬鹿さんでした。」と。しかもなお、

ただ父がどうしてこんな作品を書いたのか、どうしても解りません。しかし、この作品が先生の仰有るやうに立派な文学作品になってをりますのならば、誰も文学作品として読んで下さるでせう

し、亡い我が両親の生活の記録だと誤解する方もありませんでせう。両親ともに亡くなり、父や母とは別な人格の主人公のみが生きのこって、それが我が両親だと思はれるのが一番辛いことでございます。万一ご発表なさる場合には、両親の名誉のために、どうぞこのことだけはせめて書き加へていただきたうございます。

というのが、〈作者の遺児〉の付言の主旨である。この作者仮託はかなりしつこいものといえようか。すなわち、

①「芹沢先生」と呼びかける
②実際の作者である「父」は生前一作も発表していない
③同人はすでに物故している

という三点で芹沢とは別人物であることを強調し、更に、

④実際の作者から直接ではなく、その遺児の手を経て提供されたという形をとることで、〝実際の作者〟乃至〝素材事実〟との距離感を設ける。作品本文以外に〝実際の作者〟の風貌や〝制作〟過程を、読者があれこれと勘ぐり難い感じを構え出しているとは謂えないか。

だがしかし、その〈構え〉と、予想しうるその〈実効〉とは、必ずしも一致すまい。まず第一に、そうした構えの入念さ（?）とはまさに逆に、作品本文における主人公や人間関係の外貌は、「ブルジョア」と比べてもはっきりと、芹沢の私生活事実に近づけられているのである。例えば「私」が「経済学者シミアン博士の愛弟子である」（一）とか「社会学をすてきって、本気で」「文学をするのだと、自分にも云ひきかせ」ている（三）とかいった、経済学＝社会学徒としての閲歴と療養中の方向転換とは、最も簡略にまとめられた場合の芹沢の略歴と照応する。略歴など見ないという読者にとっても、芹沢のいわゆる愛読者であるならば、べつの芹沢作品との綜合によってこの照応は感得されるはずである。例えば「橋の手前」（昭8）系統の、思想的苦悩を主題とした私小説ふうの作品にも、芹沢と思われる主人公は店頭に積まれた通俗景気解説書を「棄て去った専門のもの」と謂い、「同じ学問を励」んだ仲間の或る者は「デュルケイムの実証社会学から次第にマルキシズムに移って行った」が主人公は「病気で小説を書く」ように「変ってしま」った、といった設定（「橋の手前」一）があった。

かくてどちらの型の愛読者にとっても、「離愁」の「私」は「ブルジョア」の「沢」以上に、芹沢自身と解されるだろう。「ブルジョア」を客観小説として読んだ者も、「離愁」の方は私小説と観ずることになり易いのではないか。とすれば、「離愁」（を含む、芹沢の）読者が理解するところは、――かなり高い比率で、とくに楽屋話を好む読者でなしに――〈作者芹沢の私生活体験ではないと力説された・（じつは明らかに、かなり高い度合いの）私生活体験〉ということであろう。

事実として私生活体験に取材した小説であるかないか、という点の認識は、かくして、殆ど問題になるまい。しかしそれとは別に、この体験取材小説を扱う作者芹沢の姿態（ぽおず）という問題が残る。

前述のように仮託序を添えることによって〈非・体験取材〉〈非・私小説〉という理解を強請するのが、作者芹沢のぽおずの最表層である。しかしこの仮託を読者に信じさせ通し得るとは、前述のような事情からして、芹沢自身も恐らく考えてはいなかったろう。即ち、〈非・私小説〉というぽおずは見破られることを予定したぽおずというわけであり、見破られるつもりでいる以上、真の意味のぽおずとは云い難い。芹沢が読者に対して示しているぽおずの究極のところ、云いかえれば芹沢が真に期待している受け取り方は、非・私小説という誤解ではなくて、〈非・私小説と言い做したいような性質の＝私小説〉という、行きとどいた理解ではないのか。

勿論、小説の主人公が一往は作者と別個の三人称で提示されながら、内容的には些か（又は、余りにも）作者の自画像くさい、という事態は、決して珍しくない。むしろその方が、「私」と名のり作者の生活その儘を忠実になぞっているのだという姿勢をとる、型にはめたような私小説よりも、例を拾い易いかも知れない。だがその場合の主人公三人称化は、多くは一種の慣習的な通り一ぺんのものであり、殊更に意味をもって一人称発想と比べ択び採られたわけではないものだったのではないか。三人称化したこと自体が格別のたくらみというわけのものでないならば、たまたま烱眼の（或いは通常の）読者に見破られたところで、〃見破らせようという企らみ〃などといわく有りげに評するのは、評者の一人相撲に過ぎるだろう。

だが、「離愁」の〃非・私小説〃化は、本文中で「私」と称する代りにふと仮託の姓で呼んでみるなどというのとは性質が違う。十分に意識されねばこのような形になりようのない、念の入った擬装である。読者がそれをどう受取るかについては殆ど問題がなくとも、作者がなぜそれを為したかについて、考えずに済ませるわけにゆかぬ異常性があるといえよう。

(B₁)実際は作者の私生活体験「である」

(B₂)しかし、「作者は」そう受取らせたくないと「思っている」——

「離愁」の仮託序によって芹沢が読者に与えようとした認識が、右のような二層構造であるとすれば、そう認識させることの効果乃至想像し得る目的は、単純に

(A)作者の私生活体験「ではない」

といって押し通す（より普通に見られる）型に比べて、かなり違ったものである。

(A)の場合、最も一般的には、作中の人物や事件を実在の或る人物（作者を含む）や事件として認識されるのを防ぐ、ということが考えられよう。いわゆる「皮剝ぎの苦しみ」に堪え切れない程の自己身辺の醜を描破しようとする場合の、せめてもの自己欺瞞として。或いはもでる問題の紛糾を恐れて。又はより積極的に、自己の制作意図に従って捨象し変型した部分を、読者がもでるについての知識から勝手に復原して読むことを、防ぐために。しかし、(B₁)・(B₂)の型（絞って(B₂)と云ってもよいが）では、それらの効果は期待し得ない。勿論、目的とはされ得まい。〃実のところは自分の体験事実なのだ（が）〃と、作者自ら底を割ってしまっているのだから、実在人物に結びつけない認識など、相手が勘違いしない限り期待できないし、期待するとしたら方法がまるきり逆である。

(B₂)の認識の効果・目的は、また、(A)が拙劣に行なわれて(A)本来の目的を達し得ないという場合の結果とも、違う。もっとも、わざと粗雑に行なわれ三人称化を仮構と見破らせるという場合には、すでに(B₂)の一変種であるわけだ。わざとではなくて、あくまで(A)なのが心ならずも見破られるという場合を考えると、その場合は〈結びつけない〉という一つの効果が〈得られない〉といった、効果〈零〉なのであって、逆に〈結びつける〉という逆効果を確立してしまうわけではない。「見破る」とはいっても、正確にいえば或る一部又は多数の（決して、すべてではない）読者が自分の立場で仮構と「感ずる」のであり、その感じの当否、本当に「見破」ったことになるのかどうかは、作者による保証などありはしない。

それに対して(B₂)では、〈結びつけない〉という効果を一たん自他共に意識に上せたうえで、それが作為的な擬装であることを確認している。そこまで、曲折・仕組みが明らかである以上、〈結びつける〉べきだというのが結論になることは疑いない。だが、〈結びつける〉という最終結果が目的だったとしたら、仮託序の仕組みは馬鹿馬鹿しく無駄な手数と謂うしかない。そんな最終結果だけの為だったら、

仮託＝それを自壊させる、という手続きは、煩らわしく重すぎるに違いない。

もってまわった手続きが馬鹿馬鹿しく均衡を失しているわけでないとすれば、それは、この手続き自体に意味がある場合であろう。作者の体験事実と結びつけられ〈まいとした〉という途中経過、結びつけられ〈たくなかった〉という作者芹沢の心理を開示するのが、目的（少なくとも、その一つ）だった場合であろう。云いかえれば、私生活体験や実在人物と結びつかない（又は、つく）ものとしての作品像などよりも、結びつけたくないと念った作家像を認識させようとするのが、仮託序の仕組みではないか。「離愁」序の表現を借りれば、釈明されているのは作中人物に擬せられる＝作中人物として描かれてしまったもでるの「お人柄」ではなくて、それを描いてしまった側、作者芹沢の、作者としての心情・人柄ではないのか。

Ⅱ

それでは、「離愁」序というこしらえ事によって説明される真の作者芹沢の心情や制作態度は、どんな点で、釈明たりうるのか。どんな点が、作者芹沢の利となる認識・理解をもたらすと思われたのだろうか。

と、更めて考えてみても、序の設定によって明かされたことは、結局、「自らの私生活事実を・そうではないように装いながらも、書いた」、云いかえて「そうと知られたくないような私生活事実を、書いた」という〝内実〟に、尽きる。

これは作者としての誇り、認識してもらいたいと希うような真面目で、あり得るか？といえば、恐らく、あり得よう。しばしば西欧風な発想法云々の評を冠せられるこの作家としてはやや不似合な趣はあっても、日本の近代小説一般とすれば、それだけで作家精神のあかしになると考える態度が、主流であり主潮だったと云えよう。この一般的な態度そのものの是非は、また別の問題である。従って当面の問題は、「離愁」で芹沢の描いた〝私生活事実〟が、確かに「そうと知られたくない」「そうではないように装う」のが当然なものかどうか、ということに限られるべきだろう。躊躇や擬装をまじえながらでもともかく「書いた」というだけで、十分痛切な苦しみが察せられるような事柄が、事実、「離愁」の中に存在しているか、ということに。

平俗に云いかえれば、「離愁」に、常凡ならば目を掩って描かぬであろうような、自己又は近親の醜が剔抉されているか、ということだが、人間のどのような面についてとくに美醜を敏感に感じ、かつ、どうあった場合に醜と感ずるかは、投げ出した云い方をすれば十人十色ともいえる。しかしこの場合はわれわれ各自の判断基準を持ち出して当て推量をするまでもなく、同じ作者芹沢の判断例が、極めて比較対照し易い形で手に入る。〈第三者の書いた・かつ（その第三者にとっても）虚構〉という仮託を、「離愁」の場合とちがって芹沢が施さなかった「ブルジョア」がそれである。

今更くりかえすまでもあるまいが、「ブルジョア」の主人公も「沢」という三人称で呼ばれる。しかし、「私」と名のっていないとか「芹沢」と呼んでいないとかいうことは、作者の私生活体験でないと思わせる意図を含むとは限らないし、含むとしてもごく通り一遍にしか含み得ない。かりに仮託の意図があったとしてもその程度の作業で気が済んだのであれば、「ブルジョア」において醜の剔抉の苦しみという自意識は殆どなかったに等しかろう。

「ブルジョア」と「離愁」との間に、それほどの自意識の差を生ずべき内容上の対蹠点は、何があるか。

つきつめていえば同一の素材と思われるこの両作の、従って実在もでるとしては同一と考えられる登場人物の人間像が、大きく変貌し

ているのは、主人公「沢」――「私」よりも、その妻の方である。少なくとも、「ブルジョア」よりも「離愁」の方が直叙し難い程に醜である――という方向に変貌しているのは、妻のほうである。

もっとも、これは正確には、（主人公の目から見て）と但し書きすべきだろう。主人公の目を離れてならば「直叙し難い醜」と映ることもありそうな事態として、「ブルジョア」にも、沢夫人の性の不如意による仏人るい。べるとらん（ふぉおこんねと戯称される）との関係がある。

性交渉が極度に響く肺患の沢は、夫人とは病気以来「兄妹の生活をし」ており、「生きようと念ふ故に、妻を妹と見るのに、苦痛も不自然も感じな」い。「子供まで巴里に残して来て看護に骨を砕く妻から、誘惑さへ感じな」いし、「妻は妻で妹となり切ってゐ」るものと信じている。だが、夫人の方は常にそうばかりはあり得ない。療養所を一歩出れば、病む夫に満たされない妻たちを特殊な街区に誘い込もうとして「奥さん、貴方の求めるものを知ってゐます」「健康な男が待ってゐますよ」と呼びかけ「魔法のやうに夫人の軀を慄はせ」る、「お伽話の魔法使ひの媼さんに似」た女もいる。療養所の内にさえも、離婚した人妻の病室を夜々訪れる青年を見かける。

月に一度の銀行通いに山を下りた或る日の帰り途、登山電車の中で夫人は「隣りから寄りかかって来る紳士の体」の重みが「自然の力だけのものではな」いことを感ずるが、彼の眼に「フランス人独特の温良さが読め」ると、やがて「緊張して無理に抵抗することを止めて、その頑丈なからだを頼もしく見た。」彼も妻の療養に付添って来ている身である。別の日、又街で出会って歩きにくい雪道を行きながら、夫人は「何度もつまづき支へられ、優しい男の愛撫に、恋を囁かれる様な思ひで、その男の妻に対する愛を聞いた。」その晩、夫人は沢の寝室を訪う。「夫の腕に抱かれたかった。優しい言葉が聞きたかった」のだが、「眠りを破られる翌日の疲労が、直ちに計算される」沢の応対は冷たい。夫人は「耐へられない怒りが心臓で唸」り「一言でも口を開けば、怒りが燃え出しさう」だった。

「夫人はすうと消え」「これは一瞬間に終った出来事で、沢は悪夢に襲はれたのではないかと思った」が、それからいつか夫人は「健康な男」という言葉に「付き纏はれ」、「読書しながらも聞」くようになる。「辱しい夢さへ見た。」「『早く癒って下さいね』夫に催促らしい言葉を出すに至った。」「パジャマの儘、夫の部屋を叩かうとしたのは何度であったか。」そうした或る夜、隣室の患者のしのび逢いを目撃してしまった夫人は「熱病のやうに血が狂」い「ふらふら起き上っ」て夫の部屋に入る。

白い毛布の上にあった頭が動く。夫人は其の頸を強く抱いた。泪と息が、沢の顔に雨と降る。夫人は待った。待った。

強くかかへて夫人の軀を寝台に上げようとした男の腕から、突然に力が抜けた。その腕は、横にかかった外套を引きとって、顔へてゐる夫人の背にかける。

「我慢しておくれ」

地獄の底から声がした。

「許しておくれ」

しめった声が耳にした。夫人は外套を振り棄てて立ち去った。部屋の戸を永久にしめるぞと、音を立てた。

この夜の後、「沢は努めて快活に装っ」て、別荘を借り巴里から子供を呼ぶ計画を持ち出す。「夫人もその心を読んで明るい顔を見せ」「悪夢だつたと互の心に読」み、「この環境が悪いのだと、夫人は自らに弁解もし、鞭撻もして」、街へ出かけ気を逸らす機会となっていた「フランス語の勉強、裁縫の稽古」も「止めてしまった。」

だが久しぶりに郵便局に下りて行って、あの仏人紳士（べるとらん）

に出会った時、彼の妻の手術も無事終ったと聞き、沢夫人の方も「春になったら帰れさうですわ」と、互いの病人の経過を喜ぶ会話が、夫人を「女学生のやうな足どり」にさせる。何の不安もなく小ほてるの前に出て誘われた時、「夫人は黙々と従った。」

熱のある脣で女の口を閉鎖した。夫人は叫ばうとするよりも、気が遠くなって、男の頸を犇と抱いた。

女の軀には血潮が漲った。（略）ホテルも、スイスも、高山も皆海底に沈んで、心臓の音のみが、夫人の耳に波音となった。

（以上、一章）

これは、あと十年時代が遅ければ、検閲の網にかかつたことも考えられる態の、――筋よりも描写であるかも知れない。しかし、「沢」はそう感じとってはいないようである。さきに引いた、妻の憤りに対して「努めて快活に」何でもなかったように取り做すこともある。沢を恋するせるびあ娘から夫人の密会の事実を仄めかされても「余りに暇である為の、悪びれた」「創作」と「解したかった」りもする（三）。そうした態度には、

巴里で見聞した夫婦では、さうしたことは当り前のことだった。それを知りつつ、お互に自分達の生活をして、便宜的に一つ屋根の下にはゐるが、その為に、互を擦減することのないのを見て、聡明だとは思ふ　（三）

理性と、一方「日本人に出来る芸当ではない」はずという希望的な安心（三）も働いていよう。更に、意を決して打ち明けようとかかった妻を、「言ひ過ぎてはいけない。よく話したい誘惑にかられて、言ってしまって、後悔することがある」「君の腹に納めて置いて良いものなら、さうした方が利巧だ。済むも済まぬも、我々の間には無いからな」と制する。「私を愛して下さるの？」という夫人の絶対本質論的な追求を、「僕の病気の間は」「そんな暇はない筈だ」、「何より早く健康にならなくては」と、目先の急務にとらわれた形で外らすのだが、それは実は「既に恕してゐるのだと」夫人にも次第に解ってくる。（四）

沢にとって、「日本人に出来る芸当ではない」だろうという甘い楽観は毀たれた訳だが、それも元来、日本人には「許されない」というのではなかった。沢の論理や、まして倫理に、妻が反したわけではないのだ。己れを「巴里で見聞した夫婦」という一般の中の一例としてとらえ、「皆此の病気がいけないんだ」（四）と状況・環境要素を無視しない沢の客観的な認識態度にとっては、妻の行為は、人並み外れた悪や本質的な過ちでは決してないのだ。

沢が夫人の行為を〈ゆるされないもの〉としてはいないのと、ほぼ歩調をそろえて、作者も又、夫人の行為と表裏した、相応の反省と自責を設定している。それは、夫人の行為は行為として、それと綜合した場合に、夫人の全体的な人間像をいわゆる尋常人の枠内に落着かせる態のものであろう。夫人はべるとらんとの何度目かの媾会の宿で、「僕達が結婚してゐたらとよく思ふよ」と云われて、「腹立たし」く、「それでゐて幸福」を感ずる。しかも、ふとほてるの鍵が落ちたのを拾い上げると「躊躇することなく」谷に投げてしまう。「御主人に知れた？」と問われて、「私が怖ろしいの。貴方が憎い――そのうち奥さんでもお亡くなりなさったら、私生きてゐられませんもの」「私が身投げしたと思って諦めて下さい」と答える。（三）

「夫に打ち明けねばならぬと云ふ」決心も、「何度も」しながら、「却て病気を悪くすることに終ることを考へて、其の間際に躊躇してしまっ」てきたのである。だから、「然し、今はどんな結果にならうと、夫に詫びることが現在の苦しい立場に解決をつけるものである」と考えて告白しようとした時、夫に柔かく回避されると、「ご病気だから卑屈になったと云ふのではないでせう。私、もっと悪い点をお責

め下さらなくては――」と云い募ってしまう。「崩れかかる自分を強く支へて呉れ」るものを夫に求めて、それを与えられないのが「不安であり、頼りない。或る種のフェミニストである夫が、ありがたくはあるが、近くに感じられない。世間並みの夫であったらと思ふやうに」さえなるのである。（四）

夫人は、倫理と共に肉体も持ってしまっている通常の女として、その止むを得ない陥ち込みを描かれている（しかしあくまで止むを得ないものとして）もの、と概括できようか。それに対してしかし沢も又、理性を持ち過ぎてしまった知識人として、「世間並みの夫」に降り得ないことの、欠陥としての面も感じさせているのではないか。

即ち作者芹沢の立場からも、沢夫人は、少なくとも沢との対比に於て一方的な否定や絶対的な格差などを与えられてはいない。

客観的に（即ち、読者が独自に）は醜行といえるにしても、作者の側からは、作者芹沢の扱いとしても作中主人公沢の受取りかたとしても、〈醜行〉とはしていないのである。

そしてこれと反対の事情が、「離愁」の妻A子の性格的欠陥と、それに対する主人公「私」の感じ方の間に、在る。

「離愁」のA子の性格の表われを悪しざまに数え上げれば、悪意からではなく幼児のように自分の得失しか感じ得ない為の自己中心性や我執のつよさ、それと表裏をなす夫を含めて他人への無理解とその結果としての薄情さ、わが子に向けての本能的衝動的な愛撫と、対照的にひすてりっくな憎しみの発作、金銭的。物質的に事を解しがちな貧しさ等がある。

この一部分ならば――ごく一部分ならば、「ブルジョア」の沢夫人にも付与されていると、いえないこともない。

「貴方の求めるものを知ってゐます」と、「黒い鋭角の目」の老婆に誘われた日、「余り不幸過ぎる自分が悲しくなっ」て、「あゝ、私も日本を見たいわ。子供も……」と夫に訴え、

「子供の処へ電話を掛けて元気をお出し」やっと歩けた女の子、託児所の赤ん坊達、日本の家庭、今日会った老婆……熱い目を閉ぢても映る。

と、どうにもならない母性の悶えに乱れることもある。（一）

又、春に近い或る日は、「近頃何事にも興味なささうな様子」だった夫人が、突然、「私巴里に帰ります」と「宣言し」て、その日のうちに立って行ったこともあった。

もう遅くも二月で帰れるので沢は思ひ止めさせようと色々と宥めたが、

「もう一日でも子供を見なくてはゐられません」と普段の柔順なのに似合はず、一歩も引かぬ覚悟が響いてゐた。

もっともこの時の事情を夫人は、のちにべるとらんに向って、「貴方に会ふまいとして巴里に帰った」のだと説明している。（三）前件に比べて、母性の惑乱に対する女の苦しみの比率が高くなっているかも知れない。後者に対して主人公や作者が〝劣情〟視していないことは前に示した通りだが、それと絡まった母性の惑乱の方も、これらの文章ではとくに始末に困り見下げられてはいまい。

ところが、「離愁」はそうではない。

「ブルジョア」の沢夫妻における主たる紛糾だった、夫人の性の不満の方は、「離愁」では逆に

A子には、此処の紊乱した男女の戯れが鼻もちならなくて、（略）かりにA子がここで女らしい過失を犯すことがあっても、それが一時的にもせよA子の感情を昂揚し浄化して、此処の生活を堪へ易くするものであれば、私は喜ぶだらうと思ったほどだが、そのことでは、A子はあまりに立派な日本婦人である。（四）

と、むしろ有って欲しくさえなるほどに無縁なこと、とされる。勿

論、性の過失が絶対無条件に好ましいことであるという筈はないので、ここでは却て、それをしも望んでみたくなるほどの＝それをさえ上廻る、感情の荒廃を云うことの方が、主旨ではあろう。

「私」の妻A子の性格の幾つかの面（といってもそれ以外の面はこの作品で殆ど触れられていないのだが）は、それほどまでに、「私」に疎まれている。A子について初めて述べるのは第二章だが、療養にとって最も大切な積雪の季節に入って、高原に来てからはじめてのA子の便りを卓上に発見した刹那、「私」は、

それまで陽気だった胸のなかが一度に凍る思ひがした。悲しいことだが……

（略）　A子の手紙の内容は、開封しなくても分った。不満、愚痴をならべて、私をおびき寄せようとするのであらう。貴方なんか死んだ方がいいと、病気以来何度も云はれた通り、私は死んだのだ。死んだ者にならなければ、私は生きられないからこの高原に来たのだ。そして、いつも胸のなかをのぞきこむやうな妻のそばにゐないことが、どんなに総ての時を平安にし、私を濶達にしたか、（略）

異国で夫に病まれた妻という、自分の身の不幸ばかりを感じて、夫を労わることが出来ない、と「私」が慨くのは、具体的には、

「ラバスールさんての方のお母様が、子供を見舞って下さいました。立派な奥様で、なんですか、子供に洗礼をするやうにと熱心にすすめてゐますが、私は神様の話など嫌ひです。こちらにゐてもすることはなし、そちらへ行くか、子供をのこして一人日本へ帰らうと決心しました。もう知りません。ラバスールさんへは、貴方からご勝手にお答へ下さい」

という手紙の文句が「A子としては珍らしく情味のあるやさしい言葉」だ、ということである。託児所に預けてしまってある子供は、週二回訪ねてはいても「わが子であってわが子のやうに扱へない不平」があり、そこへ「異邦の婦人の親切を扱ひかねて、おろおろすると同時に、そんな目にあふのも、みな私（夫）が悪いからだと、秘かに怒っ」たのだろうと、「私」は察する。そして恐らく「ラバスール君の母堂にもやさしく感謝できなかったのではなからうか……」と。（二）

やがて或る日、突然A子が高原にやって来る。散歩から帰った「私」は最初「女中か誰かを見誤ったのであらうと、やっと動悸をしづめ」るのだが、それは「何か不吉な予感」としか感じられない。「わが妻を迎へて喜ぶべきなのに、胸の凍りつくやうに感じたのは、もう私は妻を愛してゐないばかりか、おぞましく思ってゐるのだらう」。予感どおりA子は、「淋しいフォンテンブローの森で独り苦労してゐる」自分を「無視して」「暢気に」療養している、と泣き罵り、室に置いてあった新刊の小説本五六冊が既に破り捨ててある。看護婦が療養所での夫婦生活の禁制を説く遠廻しな表現を、殆ど聞きとれなかったA子は、「チップをやらないので、おこってゐるのでせうか」と「私」に訊くのである。

A子は、この高原に家を借りて赤ん坊を引取り三人一緒に暮らそうという相談に来たのであった。「私」が子供への感染を懸念して躊躇していると、また「父性愛を疑ふと云って、啜りあげる」。（三）「遠く故国をはなれて、親子三人が全部はなればなれに異邦人の間にあることは、もう不安で一日も耐へられない」、「三人で暮すことで、かりに不幸が起きようとも、それを俱々になって運命として諦められるが、このままでは、もとめて不幸を創ってゐるやうなもので、いっそうのこと、三階から雪のなかへ身投げしたくなる誘惑にまけさうだ、と涙を流して嘆く。」

しかし〝不幸な運命も俱に荷う〟とは云ってみても、「私が冷酷にも闘病のみしてその戦のなかでA子に組しないため」もあって、A子

は療養所に滞在している間も時に発作的な狂乱が抑えられない。「綿々と愚痴をのべたて」「私の読んでゐる小説を奪って床になげつけ」「私を悪人のやうに罵倒さへする。」（四）巴里の託児所にいる子供の発育の悪いことで「私にくってかかり」、「いつか私の毛布にも外套にも下衣にも鋏がはいってゐて、私はおぼつかない手つきで自ら繕」ったりもした。

結局夫の傍にいても「何の役にもたたずに、自分を毀すこと」に気付いてA子は又一人巴里に戻って行くが（五）、戻って行けばやがて「珍らしく」届いた手紙には「己の筆無精はたなにあげて、私の沈黙にはもう耐へられないと書」き、

貴方といふ人には私や子供はあってないに等しいのでせう。ようございます。私もいろいろ考へて覚悟ができました。今までは子供があるから日本へ帰れないと貴方もたかをくくって、私をないものにしてゐたでせうが、子供をつれて帰れないものならば、私一人で日本へ帰るまでです。貴方はどうぞ勝手にあそばせ。貴方の利己主義の犠牲になるのが、自分で我身が不憫になりました。私が子供をおいて日本へ帰った後の貴方の困り方が、今では却って気味よいことに感ずるくらゐです。

と「面罵してゐた。」この場面では「私」も、

A子が帰国するならば帰国するもよし、私は必ず全快して、子供をつれて帰国するぞと、唇をかむより他になかった。

と、突き放さざるを得ないまでの状況であることを認めている。（六）もっとも、結果として・又はこちらとしては‖突き放すしかない程のものだ、ということは、当のA子がその取り做し様の無さを十分意識し決裂を覚悟していることを、必ずしも意味しない。A子の場合は自分の言動の効果や結果を、深部まで、又先々まで見通せず、見通す必要も思い浮かべない型として捉えられている観がある。半年の高原療養を終えて巴里へ戻った「私」が、一まず落着いた郊外のほてるにやって来たA子は、「あんな離縁状をつきつけたことなどなかったやうな態度で、高原をおりる許可をもらへた喜びを祝ふのでもなく、きのふ別れた知人に逢ふやうな淡々たる様子で」「私のゐる所が己の場所だと自然にきめて疑ふこともないやうに、隣室に部屋をとって安心してゐるらし」い。その癖、早速子供を見舞おうと「私」を誘い「私」がその前に今後の方針を話し合おうとすると、「父性愛が冷却したものと判断して顔色をかへ」る。

この行きちがいは、「私」の考え方では「夫婦の間で感情の動きや行為の動機などをいちいち説明し合はなければならないのは煩雑なことであり情けないことなので、私は常に言葉でなしに感じとってもらはうとするのだが、A子はそれを愛情の努力を欠くのだと淋しんだり非難する。しかし私もA子と尤もらしい会話は、軽蔑するけれど、子供の処置のやうな重要なことについてはA子に相談して、A子に納得してもらはなければならない」と思う食い違いを、予て疎通させるべく努力を欠いていたため、と考えられる。

妻の方が考えかたも理解力も劣者であるのは事実だとして、優者の側にも、相手の理解を手とり足とりしてやる——義務とか責任がある、とは軽々に云えまい。しかしその反対にたゞ嘆じているだけで十分なのだ、と、少なくとも当の優者が思い込んでいる場合は、そういう彼の強さ。正しさに対して、非難もし難いが、その嘆きを快よく聞いてやり温かく肩を抱いてやるのにもわだかまりのある思いが、私かに制し切れぬことになりはしないか。第三者が止むを得ないと評するのは妥当だ、しかし、本人がそう言ったら響きが異なる、しかし論理的には、たとえ誰の口から出ようと〈止むを得な〉かったのは事実なのだが、——という場合があるはずだ。そういう場合に本人があえて言うとしたら、それは自分の立場の面倒さに気づかないほど無神経で

あるか、自分の場合は〈止むを得な〉さが別格だと断じている自恃か、それとも思い切った冒険かであろう。

「離愁」の「私」に、そうした或る種の〈異〉常さ、――人並み以下の〈劣〉〈弱〉さではなくて並み外れた〈強〉さという意味の違和感は、まったく無いだろうか？　例えば右の食い違いを更めて（!?）痛感した直後に、私は、今後の方針について前に高原から書き送った手紙が「短かったために、忽せにしてもよいのだと思はれたことをさとっ」て、或日A子に「荘重に」「遺言でもする人のやうに」学問をすてて文学に転ずる意志を告げる。「それならば何のために外国へ来たんです。文学で食べて行けますか」と「絶叫」するA子の〈世俗性〉は型通りといいたいほどである。しかしそれほどのA子を説得するのに、「世俗的なことにこだはって、第一義的な生き方からはなれてはいけない」「生命は貴いもので」「文学は今や私には現世に於ける唯一の生命のよろこび」だとかいうのでは、此方の〈出世間性〉も又型通りであり、相手の極端さを心得ているという自分がやはり、自分の位置している極端からは一歩も踏み出し歩み寄っていないことになる。「貴方には私の心配も分らない」とA子は言う。知的能力においてA子より遙かに高い「私」はA子の心配など論理的に「分り」きっている、と云いたいわけだろうし、勿論云い得よう。だがそういう懸け離れた高みから（だけ）教えさとすこと（のみ）で脱却できるような心配であり、解消しうる隔たりとしか、「私」が解していないのだとすれば、A子の言った意味とは違ってもやはり「私」は「分って」いないと云われても仕方があるまい。（以上、七）

「私」とA子が再び一つ屋根の下に暮らすようになってからは、「生活をともにする相手」即ちA子を「感情の上で意識しないやうな穏かな朝夕」が「私」の「幸福」だとか（八）、「わが妻であるA子が、私の精神や内的生活に、」避暑地で知り合った「牧童ほどにも関心を持たない」（一一）とかいう述懐が、ふとした折に思い出したように漏らされる。日々の生活だから激しく意識はしないが、しかし常に底に在るのだ、という感じで。同時に、「A子を安心なところにおいてかからなければ、もう私の新生も期し得ないやう」で、「A子自身は私の内的生活から離れて他人のやうになってゐようとも、かたはらにあってA子をみまもり、過失なくすごさせて、いつかは私の念願とする精神の世界に住まはせることができなければ、私の企図する創作もつひに手すさびごとではなからうか……」（一一）という決意が、抗争者の立場から教導者の立場へ、憤懣から諦観へ、という推移を感じさせてゆく。

あえてA子像の変化をいうとなれば、A子への不満＝A子の欠陥の捉え方・描き方は、平静化して行っている。しかし描かれた限りではそれはあくまで「私」の感じ方や観念という面の変化であって、それに伴なうことを予想し易いA子への「私」の具体的な働きかけの増加や質の変化は、明らかでない。さきの〈決意〉についていえばそれに基づく具体的力行として何が生じたかは、記してない。従って、決意以前の「私」にはね返って謂われるべき何程かの欠陥という悔いや自責も又、あるべくして欠けていた特定の行為を指摘する形の具体的なものとはならずに終っているのである。

Ⅲ

「離愁」で作者の身辺事実と明示したくない程の恥、しかも描いたことが作家として誇らしい程の醜。それは全篇を通じて粛然たる風貌を崩さぬ「私」ではあり得ず、妻の側の、狭い性格、貧しい精神を目していることはまず疑いあるまい。しかしこれらは果たしてそれほどの醜であり恥であるか？

この疑問は、衆目には恐らくより確実な醜と映り易い「ブルジョア」

の沢夫人の不倫を特に非。体験と縷説しなかった、あの先行事態と対照して考えることが出来る。即ち、芹沢にとって（沢夫人の）不倫は、かりに作者の私生活事実と思われてもさほど介意しない程度の醜でしかなかったが、「離愁」のA子の卑小さはそのように突き放せぬ問題と感じられたのであろう。沢夫人のみを指弾しがちで各自の内なるA子には忸れてしまっているわれわれの通俗。処世道徳と逆に、この作者は精神の問題に極めてきびしく、かつ感じ易いのであろう――と。

かくて「離愁」における芹沢は、作家精神のほかに人格主義ふうな人間観のきびしさをも示したことになる――。だが、ここまでの段階でそう云ってしまうと、事態の全貌を見尽くさぬ儘の結論ということになろう。その人間観から当然告発されるはずの欠陥といったものは、「私」については殆ど感じられない。

「私」自身についての反省は勿論皆無ではない。例えば①自分の病因について、「肺病といふのは、色情のあやまり、結婚のあやまりから、心に未練がすてきれずに、日々心を暗くむしばんで暮すことを、神様があはれんでさとされるしるしであると、幼い日に聞いた」のをふと思い出し、「かつて愛したM子に、もはや未練はないと口でこそ云ふが、結婚したA子との生活に日々あきたらず悩むのは、神様のお目からはM子への未練」なのかと想う。（二）②夫婦。親子の別居をA子に一途に嘆かれると、それらを「理知的に処理しようといふきれいごと」を「さかしら」と反省し、「A子の本能的な愛情のやうなもののなかに」捨身する気になることもある。（四）③妻の焦慮の真因を「私が冷酷にも闘病のみし」て彼女は「一人で堪へなければならないこと」にあるのではないかと考え（四）、彼女の性格が一々周囲との摩擦を結果するのは「私」が「自己の健康にのみこだはり、僅かな生活の便益を求めて、夫として又父としての義務を逃避し」「病気にあまえて利己的な立場にゐたからだ」と自責する。（八）

しかしこれらの反省とA子に対する指摘とでは、描かれた量以上に質の差があろう。①についていえば、「懺悔しさうになる私の感情を私の意識は呵々と笑ふ」と自ら書いている通り、天理教の信者を除く読者は「私」の自責のふかさに驚きはしても、実際の色情の強さなど感じはすまい。この反省を記す「私」＝作者の意図はともかく、結果からいえば罪よりも罪の〈意識〉を、「私」の倫理性の方を印象づけられるのではないか。②は、その後の経過をよめば結局その方向は実現し得なかったわけで、従って「さかしら」という自責も一時の迷い、行きすぎだったと解される。③については、第一に、「私」の自責に反して〈病人が闘病専一になるのは止むを得ない〉とする感じ方も、読者の間に少なからずあろう。第二に、たしかに自責に値いするとしても、それはあくまで病人としての利己、病気という限時的。非本来的状態における失態である。病気という特殊条件がなくなれば闘病専一という生き方は当然消滅するし、代って他の何事かに専念し出した場合にこれ又夫。父の義務放棄にまで事実発展し生活の支障という実効を生ずる、とは、決まっていない。A子の性格的欠陥が常在するのとは、質的な差違がある。

すなわち「離愁」では、A子の性格の欠陥を容赦なく指摘した「私」自身を同じきびしい目で見て殆ど比較にならぬ浅い不覚・失態しか見出せない、ということも、併せて告白しているわけだ。A子という身うちの醜は、「私」自身のりっぱさと並べて、敢て描かれたのだ。

勿論、それがA子対「私」の事実に反するのではないかとか、作者は自分一人をいい子にしているのではないか、などと云いたいのではない。ただ結果として読者の理解に次のようなことが加り得ることは、認めねばならない。――一往は非体験に仮構した＝自己剔抉のし易い作品において、仮構したくなる程の＝きびしい剔抉を実際に（妻

には）加えても、作者自身については何程も剔抉し得なかった。それほど、作者の心性は、きびしい自己批判にふさわしい高潔な実態に到っているのだ――。

かくて「離愁」の作者は(1)「皮剝ぎ」に堪える作家精神、(2)人格主義的な人間観に加えて、三つ目の高潔さをも察せしめる。

繰り返すが、作者の心性は恐らく実際に、右の通りの高潔さに到っていたであろう。しかして「離愁」はそうした自己の主張などを意図してはいなかったろう。

しかもなお、「離愁」の作品構造の総体は、そうした作者像を遠まわしに、しかし着実に認識させ、広く芹沢文学の人格主義的・倫理的傾向を読者が受け入れる場合の、下地を形作る役割をつとめるだろう。

注
1　『昭和文学盛衰史』第十七章「ペン・クラブの今昔」
2　明治書院版・現代日本文学大事典〈芹沢光治良〉の項（赤瀬雅子氏）
3　伊藤整、新潮社版・日本文学全集「阿部知二・芹沢光治良集」解説

（昭48・1・17稿）